

## 越山若水

2021.9.12

田の畦に、川の土手に、民家の片隅に、墓地の近くに、真っ赤なヒガンバナが群生している。彼岸が近づくと忽然と現れ、燃え立つような朱色、毒さを持つという妖

しい花である▼その容姿や特徴から多くの別名がある。仏典にある赤い花の名から「曼珠沙華」、炎を連想させるため「火花花」「狐のろうそく」と称され、亡くなった人のよみがえりとする「死人花」「幽霊花」、花と葉が同時に見られないため「葉見ず花見ず」とも呼ぶらしい▼「歩きつづける彼岸花咲きつづける」。大正―昭和の俳人、種田山頭火の一句である。托鉢と放浪の旅を生涯続け、大いなる自然や自らの心情を自由律俳句で表現した。紹介した句は、鮮烈すぎるヒガンバナの赤に、漂泊するわが身の生き方を重ね合わせたのだろう▼ヒガンバナの葉は花が枯れた後で生えてくる。競争相手が少ない晩秋から春先にタップリ光を浴びる戦略。また農家にとっては、有毒とはいえ球根を水でさらせば飢餓をしのぐ救荒食品になる。畦や土手に植えれば雑草の発芽を抑制し、モグラなどの防除にも役立つ▼華麗で人目を引く半面、内に毒を秘めた魔性の花…。数ある呼び名が示すように、ヒガンバナには誤解もあるようだ。ただ他の植物と一線を画す生存戦略、それを利用した先人の知恵はお見事。納得すくその理由を知ると、親しみを覚える花である。